

a la carte.

2021.3

あらかると

410

浪江町の復興のシンボル
道の駅なみえ



東日本大震災から10年
浪江町の新聞販売店に現状をきく

東日本大震災から10年 浪江町の新聞販売店に現状をきく

2011年3月11日に発生した東日本大震災から今年で10年が経ちます。福島県は地震による家屋の崩壊、津波による被害、そして原発事故による放射線の被害を受け、10年経った今でも思うように復興が進まない現状があります。そんな中、少しずつ復興する浪江町の最前線、情報を必要とする地域の方のために奔走する新聞販売店にお話を聞きました。



(株)浪江新聞販売センター
店主 林代表

運送会社の傍ら、震災の2年前に新聞販売店経営をはじめた林さんは、現在南相馬市小高地区と浪江町の新聞配達を行っています。



(有)鈴木新聞販売店
店主 鈴木代表

3世代にわたって浪江町で新聞販売店を経営してきた鈴木さん。震災の被害を奇跡的に免れ、現在も震災前と同じ販売センターで業務を行っています。

この10年を振り返るとあつという間すぎて何をやってたか分からないほどでした。新聞配達を再開した当初の部数は7部。町に少しずつ人は戻ってきていますが、帰還している方は高齢者や持ち家がある人で、働きざかりで避難した人々は戻らないのが現状です。また現在の町の住人は元々の町民よりも復興のために新しくやってきた方の方が多くなっています。住んでいる家同士が離れており、最初は集会所ごとに新聞を届けて取りに来てもらっていたこともありましたが、さすがに新聞販売店として直接家庭に新聞を届けるという役目を果たすため、会社として採算が合わない中でも、現在はほとんどの地区の配達を行っています。町には高齢者が多いため、これからは買い物代行やお墓の管理代行などを行って少しでも町に住む人々の役に立ちたいと考えています。

浪江町の復興は昔の町に戻るのではなく、新しい町に生まれ変わること。それには100年はかかると思います。

避難していた時は浪江町にはもう戻れないと思っていました。復興はまだまだかかります。新聞販売店としては復興の一番は人が戻ってくる。ですが現状は思うように人が戻ってきていません。避難指示解除後、すぐに1,000人が町に戻ると予想されていた中、実際は140人でした。現在は、町に約1,500人住んでいますが、除染作業員の方など県外出身者が多く地元の情報である新聞は取らないため、部数の中々増えません。

祖父の代からお世話になってきたこの町へ恩返しをしたいという想いで、浪江町に戻り新聞配達を行っています。地元へ戻ってきた高齢者の方へ情報を届け、町民の方々の情報の架け橋となることが私の役目です。また、1か月ごとにどんどん変わる町をこの目で見届けたいと思っています。最初は17時に閉まるコンビニがひとつだけでした。それからスーパーができ、宿泊施設ができ、道路が変わり、漁港が再開…。ゼロ、むしろマイナスからスタートしたこの町の風景を、新聞配達をしながら見ていきたいです。

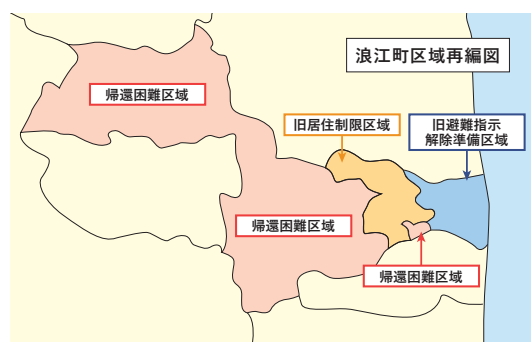


震災から「まだ」10年です。どちらの販売店でも新聞販売店としての経営は難しい中で、新聞販売店としての責任を果たし、ふるさとのために自分ができることをしたいという強い思いを感じました。



浪江町

2017年3月31日一部避難指示解除された。震災当時の人口は約21,500人。現在の住民登録数は約17,000人。町内には現在約1,500人が住んでいる。



浪江町役場HP参照

旧避難指示 解除準備区域

2017年3月31日に
避難指示解除

権現堂・高瀬・幾世橋・北幾世橋
棚塩・請戸・中浜・両竹・西台・藤橋

旧居住制限区域

2017年3月31日に
避難指示解除

川添・牛渡・樋渡・谷津田・田尻
小野田・加倉・刈宿・酒田・立野

帰還困難区域

井手・小丸・大堀・酒井・末森・室原
津島・南津島・川房・昼曾根・下津島
赤宇木・羽附

※大字名

道の駅なみえ

2020年8月に浪江町の復興のシンボル「道の駅なみえ」がオープン。買い物、食事、ちょっとした休憩ができ、町の人々の暮らしを支え、浪江町の新たな魅力を生み出す場所としての役割を果たしている。

